

## 東書「新しい社会」がとりあげた町の実例



# 神奈川県中井町とはどんな町か？

『教室の窓』一九六一年二月（東京書籍）

国立教育研究所

### 矢口 新

（「新しい社会」編集委員）

本誌三十五年六月号の、「新しい社会」は指導要領をどう受けとめたか―の座談会で、神奈川県中井町という地名が、突然、話題にのぼった。

社会科四年の「むすびあう町や村」では、人々の生活や生産活動を通して、他地域とのつながりを具体的にすがたで、多面的に理解するようになっていくが、東書の三十六年度版が、その単元の「わたしたちの町」で、生産やくらしの上での結びつきの具体的な実例として、そのものズバリでとりあげたのが、神奈川県足柄上郡の、この町である。

中井町とは、では、いったい、どんな土地か？ いや、この小さい町が、どうして一九六一年の日本の社会科教育の檜舞台にデビューするに至ったか？

その当面の「演出者」―「新しい社会」編集委員のひとりが語るいきさつと真相！

(一) エアポケットみたいな地域の性格

私の中井町のことを知ったのはもう四年くらい前のことになろうか。そのころはまだたしか中井村であった。今でも町という要素はほとんどなく、村といったほうが私にはピンとくる。そのころ、神奈川県農政部で、中井村の青年教育問題について、研究会を開催することになった。それで私に協力をしろということで、この村に出かけたのである。

神奈川県農政部の人たちが、なぜこの村を研究対象としたかというところにまたおもしろい理由があった。中井の方々にはちよつとお気の毒だが、言ってみれば、神奈川県としては、こんな所にポツンと古くさい村が一つ残っているのはどういふことか、言わばエアポケットみたいな地域であるというのが研究対象になったのであった。神奈川県ではとくに青年活動についてエアポケット的な感じをもっていた。

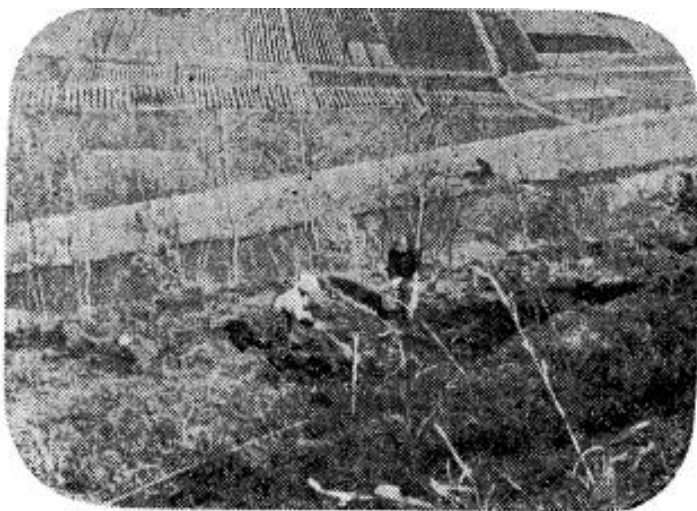
たとえば、子供が十二歳になると、親が酒を一升もって、その部落の青年団にあいさつにゆくという習慣が残っているというのである。県の農政部の人々の見解では、相当におくれた村ではないかという印象をもっていたようである。そこで、何がこの村をそうあらしめているのか、ひとつ研究しようということになって、この村へとまりこみの研究会をひらくことになったのである。集まる人々は県の農政部や社会教育関係の人々で、主として青少年の教育担当の人たちであった。私はこの辺の状態については前から多少知っていた。というのは、もうちよつと古い話になるが、地図を見ていただとわかるが、中井町の南に、海岸よりに橘町というのがある。この橘町でも七・八年前に青少年生活調査をおこなって青少年教育の研究集会をやったことがある。土地の実態、生活の実態を調べて、そこで教育の方策をたて

るといふ実証的研究を、県の社会教育課がおこなっていたところであった。

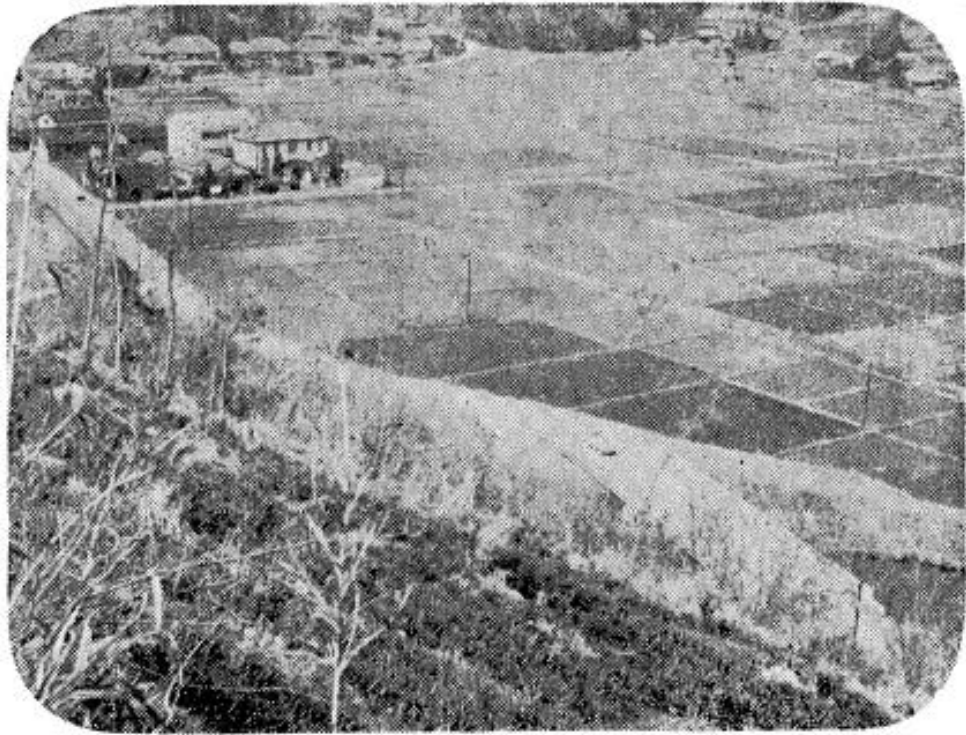
その時も私は、県の青少年教育担当の人々といっしょに、橘町とその周辺を歩きまわって勉強をさせてもらった。そんなことがあって、中井という村の名前と地勢的なことに関する知識はもっていたが、農政部の人々のように、この村が、言わば、古いというか、問題性もつた村であるということまでは知らなかった。しかし、県の人々の話を聞いているうちに、俄然、私の探求心は動き出したのであった。

さまざまな統計資料は県の農政部の人々が研究集会用にプリントしてくれることになっているので、私は三度ばかり実地調査に向いて、村のあちらこちらを歩きまわって、いろいろ勉強した。さてそうして、あらためて見直してみると、なるほど、おもしろい村である。

地図を見てもわかるように、この中井町の周辺は小田原市、大磯、平塚、秦野などという比較的全国的によく知られた町にとりかこまれている。こ



中井町の如仕事のようす



道路と輸送機関（トラック）

れまでおこなわれた町村合併などで、どこかの市か町かに併合されていてもよいような地域である。事実、町村合併の話は私たちの研究会が開かれるちよつと前にあつたそうである。ところが、その時には四

つに意見がわかれてまもらず、結局、そのために一つの町として残ったのだそうである。調べてみると、そのようなことは、いずれもこの町の置かれた自然的な環境、社会的な環境からきているのである。言わば、周囲の環境によってつくられた運命とも言えるようである。

### (二) 三つの鉄道にかこまれた近郊農村型

地図を見るとわかるように、東海道は海岸に沿って走っていて、それが南の橋町、小田原を通っている。「こうづ」（国府津）という駅は御殿場線の間である所だが、この駅は今も小田原市にはいつている。「こうづ」から出た御殿場線は中井の西側を通っているが、この鉄道に出るのも便利はよくない。中井の西隣の大井町へ山ごえで出なくてはならない。北側には小田急鉄道が通っているが、これも中井から出るには、北隣の市、秦野に出なければならぬ。言わば、これら二つの鉄道にかこまれて、しかもどれも直接にはふれていない。

周囲にある小田原、平塚、秦野などの市はなかなか活気のある町で商況も盛んである。しかし、そのどれにも交通的には便利につながっているわけではない。中井の北のほうの部落の人は秦野に出るのが便利であり、西のほうの人は大井のほうに出るのが便利であり、南のほうの人は小田原に出るし、東のほうの人は、平塚や二宮町へ出るのが便利であるといった状態である。エアポケット的情况というのがかくのごときところから生まれてきたのかもしれない。しかし、このエアポケットというのも周囲の世界と全く連絡がないから生まれたのである。むしろ、四方にそれぞれつながっているところから生じたのであるらしい。産業や生活のようすを見ると、どうもそう考えなければならなくなってくる。

エアポケット的というと、とり残された純農村というか、全く素ぼ

くな村という感じがするけれども、この中井というのは、産業といっても農業であるが、農業のようすも全く多種多様である。東書の教科書「新しい社会」(四年上)にも書いてあるけれども、まず、中井の小田原寄りのほうは山地であって、みかん地帯である。そうすぐれたみかん地帯ではない。どちらかと言えればおくられているようであるが、それでも、みかんを小田原や二宮あたりの仲買商が買いに来るのである。

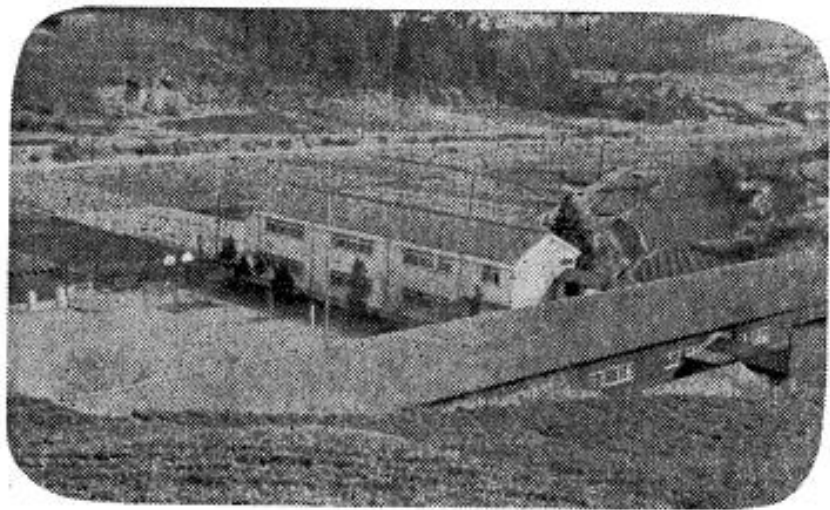
北のほうの秦野寄りは煙草の栽培がおこなわれている。これは地形的にも秦野につながっている台地であって、従って産業もまたそうなっている。酪農もまた盛んであって、これは村全体にひろがっている。主として村の東側の台地を中心にした所ではビール麦の栽培が盛んで、これはビール会社と直接取り引きをしている。中井の野菜というのは、かなり昔から盛んであって、いろいろなものがつくられている。しようがとか、らつかせいかいだった、ちよつとかわつたものもつくられる所である。どこの農家の青年も近ごろはオートバイ一台ぐらいはもっていて、ちよつと見ると商業者のように見える。

この中井の農業を見てみると、全体として近郊農村型の農業であって、都市との関係で何をつくるかを計画し栽培するという目先のきく人たちによって営まれているようである。村の歴史を見ると、明治のころから、そういうことを考える人々がいたようである。

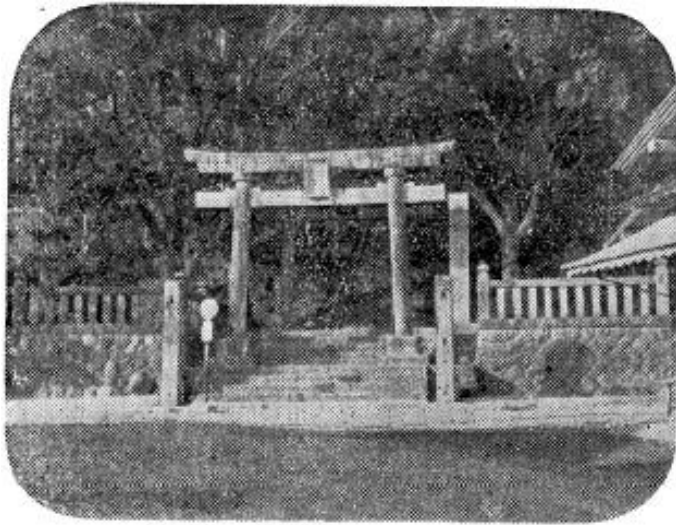
そういう関係からであろうか、この村の農業協同組合はあまりふるわないようである。というのは、農家の人々が直接、商人と結びついて取り引きをすることが多いということである。そのもつともよい例は牛乳である。牛乳の集荷を現在この村でやっているのは、森永とか明治とか、大きい会社が五社もあるそうである。そうして出荷をする組合も村の中に二十いくつもつくられている。ほとんど小さな部落ご

とにそういった組合がつくられて、会社と契約している。中には、一つの小さな二・三十軒の部落で二つの組合ができていているといったありさまである。

まとまらないというように言われているが、これは都市的な傾向かもしれない。みかんなども農協から出荷するものもあるが、直接仲買商が多いようである。村がまとまらない、町村合併においても意見がわかれたというのは、こういうところと関係があるのではないか。社会とのつながりが生活を支配している形はまことにおもしろいものである。こういう関係を細かく調べてゆくことは、なかなか勉強になるものである。



町の小学校



町の神社

(三) 丘陵地帯の八岐大蛇的な地形の部落 やまたのおろち

ところで、この町の青年活動があまり活発でないというのも、また以上のようなことと関係がありそうである。元来、農業がこういうように複雑になつていゝのは、以上のような社会的環境との関係以外に、地形的な要素も多分にあるようである。丘陵地帯であるが、その間に細い谷がいくつもできていて、私は「八岐大蛇的な地形」と表現したのであるが、そういう感じのする所である。その谷の所に小さい部落ができていゝので、実に部落の数が多い。このことがまた、この中井

の人の生活のしかたを規定している要素であるように思われる。小党分立ということがあつたが、社会が細かく分裂する傾向があるようである。それは歴史的な伝統をもつていゝものだから、案外に根づいたものであろう。しかし、それはそれぞれ閉鎖されていゝるわけではなく、むしろ、分立のまま周囲の世界につながつていゝるのであろう。

生活や産業のしかたがさまざまなのは、そういうところからきていゝらしい。たとえば、分立のまま牛乳の会社と結びついたのが、二十いくつもの牛乳の出荷組合ができていゝ所以であらう。人間の生活はそういう地形的条件も支配されるものらしい。北のほうの台地はその相貌が秦野あたりと似ていゝところがあるが、そういうところの人は秦野の影響をうけて煙草を栽培してゐるのである。

青年の活動がなかなかまとまらず、むしろ、小さな部落ごとにその伝統をもつて、お祭りをする青年団としての役割をしか果たしてゐないのは、こういつたことと関係があるのである。

そこへもつてきて、最近では村の青年たちは学校を卒業してすぐ都市へ勤めに出るようになってゐる。この村では、次男・三男問題といゝのはあまりない。都会への通勤が可能な地域で、昔から都会の生活の中へはいりこんでゐる人々である。どんな働きに出るわけである。その働きに出るのもまた、村の中のどこに住んでゐるかといゝことと関係がある。北のほうの人は北の秦野市へ、東のほうの人は平塚へ、南のほうの人は小田原へ、といゝたぐあひである。ここにもまた、村としてのまとまりをもたせない原因があるのかもしれない。

このように見ると、われわれの生活が、広い地域とのつながりをもつといゝことも、一がいに言えないことであつて、詳しく見ると、いゝろいろなことがわかつてくる。人の意識をつくりあげてゐるものはいゝういゝものであつて、村の人々が町村合併をどう考えるか、どこへ働きに出かけるか、いかなる仕事をするか、みなそういうものといゝ関係がある。それを克服して広い合理的な考え方をつくるには、やはり事実を深く自覚して、自分で反省してみなくてはならぬのであらう。そこから合理的な考え方も出てくる。それが社会科学である。